

SHOKOKAI

5

May 2025

地域を結ぶ総合情報誌 月刊 商工会

特集

「稼ぐ力」

デジタルでつくる

地域を訪ねて

ふるさとを明日へ。

熊本県芦北町

わたしのふるさと

テノール歌手

秋川雅史さん

塗料倉庫の在庫管理アプリを開発し廃棄ロスを大幅削減

株式会社フクモト工業／鞍手町商工会（福岡県鞍手町）

同社が開発した塗料倉庫の在庫管理システム「らくらく塗装屋さん」。塗装材料の削減のみならず、従業員のコスト意識を高め、営業力強化にもつながっている。

在庫管理の意識なく 倉庫はただの物置

「人がしないことをするのが好き。『こうやったらできるかな?』と考えるのが楽しいんです」
そう話すのは、株式会社フクモト工業の代表取締役、福本満寿男さん。同社が開発したオリジナルアプリ「らくらく塗装屋さん」で業務効率化と経費削減を実現し、自社のみならず塗装業界全体の業務改善につなげている。

能士の有資格者が4人在籍し、優れた技術力と豊富な経験によって地域で高い信頼を得てきた。福本さんがアプリの開発を考え始めたのは、経営の研修会で環境改善が重要だと教わったことがきっかけだった。

「それまで、鞍手町の本社にあった倉庫はただの物置き状態でした。でも昔から塗装業者はどこも同じような状態だったので、気にしたことありませんでした」と福本さんは話す。

現場の作業が終わったとき、余った塗料缶は倉庫に保管していたが、「在庫管理」という概念が、そもそもなかったのだという。どの塗料がどれくらい残っているのかを職人も営業も把握できていなかったため、在庫があることに気づかず、往復の時間とガソリン代が無駄になることも多かった。

在庫重量も感知できる 管理アプリを開発

そこで福本さんは、経営研修会で知り合ったIT企業の経営者に「スマホで離れた倉庫にある在庫が確認できないか」と相談。プログラマーも紹介してもらい、遠隔操作で在庫確認ができるアプリの開発を目指した。

アプリ制作には塗料メーカーや



01



02



03

01、02／塗料缶にそれぞれ付いているQRコードから塗料情報をスマホでチェックできる。QRコードは倉庫内の在庫塗料のあらゆる缶に 03／『らくらく塗装屋さん』は同業他者にも販売しているので、塗装業者向けに自社ホームページでバーチャル倉庫見学も実施しており、ここでは持続化補助金を活用した使い方動画でも説明しています」と、福本さん



オリジナルアプリで在庫管理体制を構築した福本さん

株式会社フクモト工業

- 事業概要：建設業（塗装工事等）
- 住所：福岡県鞍手郡鞍手町室木874-4
- 電話：0949-42-1075
- 従業員：23人
- HP：https://www.house-make.net/

【アプリ開発コスト】

・初期段階で1000万円程度
(そのうち、初めにITベンダーに支払う600万円の費用は、IT導入補助金の採択により調達)

【経費削減の工夫】

・手間のかかる塗料8000色以上のカラーデータも福本さん自らが手作業で入力することで、一般のアプリの「システム構築」にあたる設計部分の費用を削減



補助金を活用して作成したPR動画。システムの販売促進に活用している

さらに、重量よりも「あと何m塗れる」と表示されたほうが現場の職人は使いやすい」という福本さんの案で、在庫量に応じた塗装可能面積を表示するようにアプリを改良。「これまでは『180㎡だから3缶くらい必要』という大雑把な認識で塗料缶を発注。余った分は倉庫に戻してそのまま忘れてしまうことが多かったのですが、QRコードをつけて『あと何m塗れる』と情報が可視化されたことで、従業員の在庫管理意識が高まりました」と福本さんは話す。

塗れる面積を可視化 営業トークのネタにも

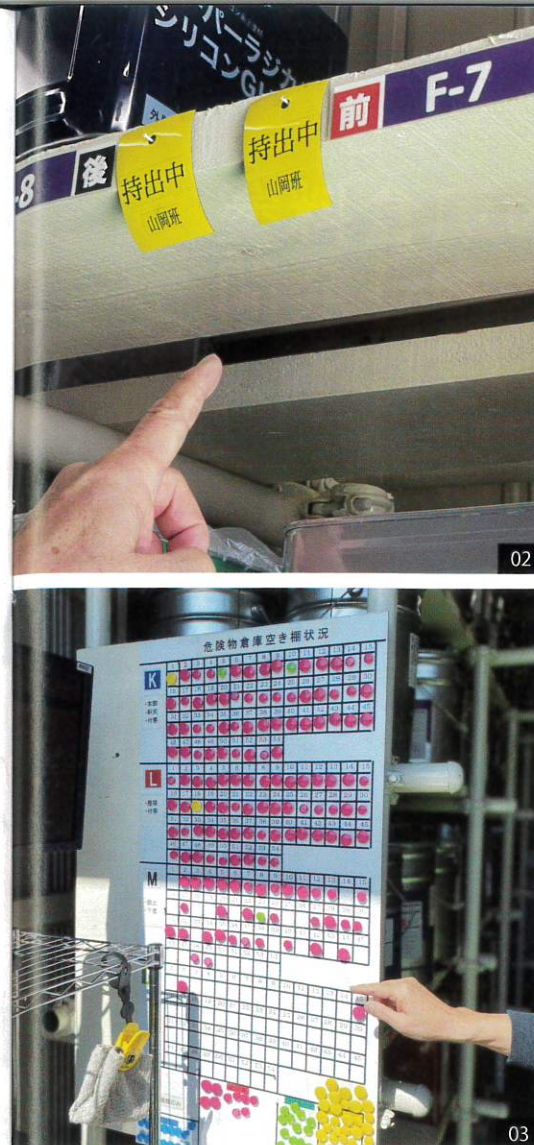
また、缶の開封日をデータ化して表示できるようにしたこと、廃棄ロスも減ったという。これまでは、余った塗料がいつのものかわからなかったため、在庫や廃棄となっていた塗料。缶を開けた日が明記されるようになったことで、顧客に対して下塗りや中塗りに再利用する提案ができるようになったという。

同業者への販売で コスト以上の売上を達成

在庫・廃棄塗料をグラフで見える化したことにより、従業員にコスト意識が生まれ営業力もアップした。金額に換算すると、2023年は年間300万円以上の在庫塗料を使用し、倉庫までの従業員の往復時間とガソリン代を合わせると、年間470万円以上の経費削減を実現。2024年も、年間280万円分の在庫が使用でき、どんどん在庫が減っているという。

また、職人たちがアプリを使っている様子を「ポスター」で発信したところ、「こんな塗装屋さんなら職人さんは辞めないでしょうね」というコメントをもらったと、福本さんはうれしそうに話す。

左から、従業員の末永阿佐美さん、福本さん、鞍手町商工会の船津敬明経営支援課長と崎山友博経営支援係長



01 / 整然と管理された倉庫内 02、03 / 倉庫内の棚の空き状況をわかりやすく表示したり、現場にもっていった塗料は棚には「持出中」の札をかけるなどの工夫も



塗料の色などに関する高い専門知識が必要だったため、福本さん自らが入力作業をしてカラーをシステムに登録していったという。結果的にこれがアプリ開発のコスト削減にもつながった。

「80社近いメーカーの塗料8000色以上を一つひとつシステムに入力していかないといけないので、アプリ開発中の半年くらいは会社にはほとんど行けませんでした。早朝から夕方までカラーデータを入力していく作業はかなり大変で、最初は泣きそうになりました」

苦労して完成したアプリの第一弾は、商品名と色番号、総重量のうちあと何kg残っているかが検索できるものだったが、重量は自分で測ったものを手作業で入力していたため、誤入力も発生していた。そんなとき、たまたま買い物をした衣料品店で、商品を置くだけで品数と金額を読み取ってくれるセルフレジを見た福本さん。「こういうことができないか」と鞍手町商工会に相談し、福岡県工業技術センターを紹介してもらった。



上 / 塗料倉庫とは別に、福本さんの祖母の家を従業員自ら改装し、打ち合わせスペースも兼ねた備品倉庫に改修 下 / 福本さんが「在庫管理の意識がなかった」という頃の倉庫の状況。使用後の塗料が乱雑に置かれていた。いつ開封したのか、どのくらい残量があるのかわからない塗料が多く、廃棄処分や重複購入の無駄も多かった